

学校教育目標	志高く 未来を拓く 高西中教育 ～ 自立・協働・創造 ～
--------	------------------------------

a ミッション	中学校区で取り組む「志プロジェクト」の推進	a ビジョン	自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することのできる生徒の育成
---------	-----------------------	--------	----------------------------------

尾道市立高西中学校

評価計画				自己評価					学校関係者評価			改善計画		
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月		h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
志高く 学びは深く 出会いが広く 心一つに未来をつくる	主体的な学びの実現	①生徒の主体性を引き出す単元構想・授業設計 ・逆向き単元構想図・指導案の作成 ・多様な選択ができる「自己決定」の機会の設定 ・学びを「自己調整」する機会の設定 ・導入の工夫 ②生徒の実態分析にもとづく、個別最適な手立ての工夫 (実態分析) ・学力分析の実施 ・支援を要する生徒に対する手立ての計画 (個別最適な手立ての工夫) ・見通しのある授業【高西中授業スタイルの徹底】 ・授業のUD(ユニバーサルデザイン) ③「いきかたナビゲーション(『いきナビ』)」の実施 ・キャリア・ログ「学びの地図」の活用 ・「なりたい自分」に近づくための理想とするロールモデルとの出会いの設定(キャリア講演会)	①生徒アンケート「自分から進んで学習に取り組んでいる」における肯定的評価	80%	65%	66%	83%	B	○「自己決定」「自己調整」する機会の設定・授業研究を始めとして、多様な選択肢から自己決定する機会を多く設定することができ、成果や課題を議論することができた。 ○協働的な学びができる学習集団づくり 自由進度学習や、選択肢のある学習の基盤として、協働的な学びができる学習集団づくりが必要であるという課題が出た。そのため、校内研修にて、学年間で生徒の学習集団としての課題と、教員による手立について議論し、共通意識を持って授業改善を進めるように取り組んだ。 ○個別最適な手立て 研修時に、支援が必要な生徒に対して、どのような手立てが適切なかケース会議を行うことができた。また、学期末には、個別の指導計画を見直すことができた。今後は、作成しただけで終わらず、支援・指導計画を活用して、授業改善を進めていくことが課題である。 ○基礎・基本的な学力の向上について 3年生は、これまでの復習のリストを授業や課題を通して、継続的に行って授業として、基礎学力の向上が見られた。 1・2年生は、これまでの学習を振り返りながら、繰り返し粘り強く復習課題に取り組ませる必要がある。 ○自己実現に向けた取組 年度初めに「なりたい自分」を設定し、その実現に向け「学びの地図」や「いきかたナビゲーション」などを軸として取組を進めることができた。学習面や生活面において、自己決定したことをやり遂げることができる生徒の割合や、計画を立てて実行したことを振り返り、改善していくマネジメントサイクルをまわし、自立的に生活したり、学習したりする生徒の割合が増加した。核となる取組と、日々の教育活動をしっかりとつなげながら取組を丁寧に続けていきたい。	3	○「個別最適な学び」(「単元内自由進度学習」等)は、昔では考えられない指導法で、先生方の努力がよく分かる。準備が大変だと思うけれど、続けてほしい。続けていくことで子どもたちもやり方を学習していくと思う。 ○「単元内自由進度学習」は、生徒の自主性の育成につながるよい取組である。 ○覚えるだけでは大学に受からない時代になっている。「考えて自分でできる」単元内自由進度学習など、自分で学んで自分で表現できる力がつくのはすごい。 ○2月15日に本校で開催される、県教委主催の「個別最適な学びに関わる教職員研修」では、これまでの取組実践を出し惜みすることなく、大いに出してほしい。そのことが、先生方のさらなる意識の向上と今後の高西中学校の発展につながると思う。	①これまでの成果と課題を踏まえ、効率的で確かな力のつく授業設計のモデルを共有したり、教科・学年で連携して、自由進度学習を行うタイミングを調整するカリマネを行ったりする。 ②生徒の興味関心や習熟度を把握したうえで、生徒に「なぜ」と思わせるような問いをこたえたり、生徒の理解を助ける構造的な板書やプリントをつくらせて「わかる授業」をつくっていく。 ③今後も系統的なキャリア教育の実施に向けて、キャリア講演会「いきかたナビゲーション」を軸として取組を進めていく。キャリア講演会で終わるのではなく、平常の教育活動とのつながりを意識しながら、生徒が主体的に学ぶための基盤をしっかりとつづけていく。		
			②生徒アンケート「自分の特性や達成度、興味・関心に合わせて学習活動に取り組む」における肯定的評価	85%	82%	83%	98%	B						
			①②学力調査(1・2学年は標準学力調査 3学年は実力テスト)を全国平均	+2	1・2年 -2.3 3年 +0.7	1・2年 ※2月 実施 75%	C							
生徒指導の充実	お互いの個性を認め合える集団の実現	①生徒にとっての安心・安全な居場所づくり ・笑顔で挨拶を交わせる集団の育成 「モデルとしての教師」 「生徒会活動・部活動を通じた指導」 「肯定的評価・フィードバック」 ・自己肯定感の涵養 「アセスと学級力アンケートによる生徒支援」 ・SSR「ほっとルーム」の活用 「相談する力」の育成 「自分の強みを知り生かす力」の育成 ②学校行事、生徒会活動等をはじめとした「挑戦の機会」の充実と「感動体験」の共有 ・生徒が主体となる自治的活動の推進 「リーダー、フォロワーの育成」 「生徒の笑顔、元気を引き出す仕掛け」 ・問題の発見と共有から始まるプロセスを大切に取組 「学級力向上プロジェクトの推進」 「各学級の状況に応じた学級活動の実施」	①生徒アンケート「自分たちの学級は、安心して生活できる学級です」における肯定的評価	90%	95%	91%	101%	A	○安心・安全な居場所づくりに向けた取組の継続と充実 日々の授業や生徒との関わり、さまざまな教育活動において、教師がモデルとなり、生徒に寄り添い共感的・受容的な人間関係づくりを行うことで「お互いの個性を認め合える集団の実現」に向けて風土を醸成することができた。2学期のアセスにおいても、教師サポートが学校全体61ポイント、友人サポートが学校全体59.8ポイント(50ポイント以上の数値が適応感が高いことを示す)であり、教師と生徒間、生徒同士においても全体的に良好な関係性であることがわかる。 一方で、学級力アンケートでは、「自分たちの学級が、安心して生活できる学級です」において学校全体は、90.8%であるが1年生の結果は77.5%(1学期92.6%)であり、課題も見られた。3学期はこれまでのアンケート数値や各学年の実態に応じて、取組を計画し、改善に向けて取組を進めていく必要がある。 ○SSR(ほっとルーム)の活用による個に応じたきめ細やかな対応 本年度より開設した「ほっとルーム」では、教室に入ることや学校にくることが難しい生徒など、ほっとルーム担任を中心に組織的にそれぞれの困り感や不安感に寄り添いながら、支援することができた。それぞれの生徒がSOSを出すことや、悩みや困っていることを相談することが少しずつできるようになってきたことや、ほっとルームでの生活を通じて、自分に自信をもつことができたり、新たな自分の良さを感じることができるようになっている。 ○鷗羽ヶ丘音楽祭を通じた「挑戦の機会」の充実と「感動体験」の共有 安心・安全な居場所づくりを基盤として鷗羽ヶ丘音楽祭では学校全体、そしてそれぞれの学級で取組を進めた。それぞれの学級のリーダーを中心に、話し合い活動を通じた目標設定、練習を丁寧に積み重ねることによって生徒が主体となる自治的活動を推進することができた。また、今年度はしまなみ交流館で実施し、素晴らしい環境の中で、生徒の意欲を高めることができた。そして、しまなみ交流館のホールでの全校合唱では、学校が一体となり、「弾けるときは思い切り」を体現し、「感動体験」を共有することができた。この経験は3年生のみならず、その3年生の姿を目標にした1・2年生にとっても大きな刺激となった。 ○学級経営のさらなる充実に向けて 各学期に1回実施している学級力アンケート、そしてそのアンケート結果をもとにして学級の課題を話し合う話し合い活動は丁寧に実施することができた。しかし、1学期と2学期の結果からも、話し合い活動の必然性や話し合い活動の「質」、そして話し合った改善策の実施など、話し合いから話し合った後のプロセスに目を向け、取り組みの必要性がある。各学級での取組になるが、各学級の学級経営計画に基づき、学級担任だけでなく、授業に出る教師、学年間で組織的に取り組んでいく必要がある。	3	○不登校になると社会との接点がなく、救われる子が減っている。 ○居場所がない子どもがSSRに集まること自体が勉強になる。性格は違えど、も「行けない」という共通点の中での交わりは楽なものではないか。何がきっかけになるか分からないし、可能性が秘められているのではないかと。 ○SSRも、個に応じた「個別最適な学び」の場だと思う。 ○今後、期待することとしては、保護者同士のつながりがあればよいと思う。 ○多くの地域の人がSSRの存在を知らない。知らないと言えない。だから、高須協議会で、「高西中ではSSR」という、社会とつながる教室がある」ということを伝えてほしい。			
			②各行事への生徒満足度(肯定的回答)	90%	98%	98%	108%	A						
			③『学校の働き方アンケート』において、「自分たちの学級は、安心して生活できる学級です」における肯定的評価	90%	93%	95%	106%	A						
信頼される学校づくり	働教の質を高め、教育の質を高める	①学校教育目標(最上位目標)の実現に向け、自己エンジンをもちた役割を遂行する【自立】 ②一人一人が知恵を出し合い目標実現に向けてチームで協力する【協働】 ③新たな価値(改善策)を提案する【創造】	①『教職員アンケート』において、「学校教育目標(最上位目標)の実現に向けて、役割(校務分掌)を遂行している」と回答している教職員の割合	90%	93%	95%	106%	A	○学校経営会議等を通して、主任主事の人材育成 毎週実施の経営会議において、学校教育方針の共有化並びに取組の重点化を図り、主任・主事のリーダーシップの下、RPDCAを回しながらチャレンジ的な教育活動を展開した。 ○学校経営への参画意識の向上 年度始めの面談において「学校組織目標」と「個人目標」のつながりを教職員が意識できるように努めた。しかし、新たに転入した教員に対しては、さらにきめ細やかな指導・支援を通して、本校教育の積極的な参画を促す必要があった。 ○主任、主事によるリーダーシップの発揮に向けた支援 学年や分掌において、主任、主事が見通しと自信をもってリーダーシップを発揮できるように経営会議で有意義な協議ができた。学年や分掌では、校長の方針を踏まえた教育活動が展開されるとともに教職員が協働する場面が多く見られた。 ○各プロジェクトが協働的、創造的に機能するための働きかけ 鷗羽ヶ丘音楽祭をしまなみ交流館で開催することにより、モデルとしての3年生の姿を全校に示すとともに、生徒のモチベーションの向上を図り生徒にとって充実感のある学びの機会とすることができた。 「水、金曜日の早期退校の促進」「入学説明会のオンデマンド開催」等、積極的に業務改善を図った。 12月保護者アンケート「高西中学校に通わせてよかったと思う」肯定的回答 96.1%	3	○学校教育目標の実現に向けて、教職員みんなが意見を言い合い、一生懸命に取り組んでいることが成果につながっている。 ○生徒の頑張っている姿も目に見えて成果を上げているので、教職員の自信になっている。 ○保護者アンケートからも、信頼されている学校であることがよく分かる。 ○「働き方改革」とのバランスをとりながら、無理をしすぎないように、今後も教職員みんなが学校経営に参画してより立ててほしい。 ○社会人1・2年生で精神疾患などに陥るケースもあるのと、しっかりと先輩の先生方がいい意味でのしたたかさや打たれ強さを育ててほしい。			
			②『学校の働き方アンケート』において、「教職員間で業務の互助や、互いに頼みやすい雰囲気がある」と回答している教職員の割合	90%	100%	96%	107%	A						
			③『学校の働き方アンケート』において、「新たな取組を行う場合、スクラップ&ビルドを行っている」と回答している教職員の割合[R4:48%]	70%	85%	85%	121%	A						

【自己評価 評価】
A: 100 ≤ (目標達成) B: 80 ≤ (ほぼ達成) < 100 C: 60 ≤ (もう少し) < 80 D: 【外部評価】 イ: 自己評価は適正である。ロ: 自己評価は適正でない。 ハ: わからない。
(できていない) < 60